

68 「認知症サポーター養成講座の取り組み」

桑名市中央地域包括支援センター 荒川育子

1 桑名市の概況

桑名市は三重県の北部に位置し、名古屋市から25KM圏域という地域であり、整備された公共交通によるアクセスを生かして住宅開発が展開され、昭和30年代後半から昭和60年ころにかけ転入者が増えたベッドタウンである。

平成16年12月に隣接する桑名市、多度町、長島町が合併した。平成21年9月末現在人口142,113人のまちである。

高齢者人口（65歳以上人口）は、平成21年9月末現在29,170人、高齢化率20.5%である。高齢化率は国勢調査による推移を見ると昭和50年から平成17年までの30年間で17,062人、190.9%増加している。同期間の総人口の増加率31.5%と比較すると、高齢者人口が急激に増加していることがわかる。

また今後10年の間に65歳を迎える人が20,000人控えており、急速に高齢化率が上がることに伴い、認知症高齢者も増えることが予測される。

認知症高齢者数および若年認知症数を平成19年度の要介護認定審査会結果で「認知症高齢者日常生活自立度Ⅱ以上の人」を調べたところ、認知症高齢者1,901人、若年性認知症43人という結果であった。（平成20年調べ）

2 認知症サポーター養成講座の取組

（1）平成17年度

認知症を知り地域をつくる10ヵ年キャンペーンが始まり、当市でもキャラバン・メイトが5名誕生した。

（2）平成18年度

地域包括支援センターが直営で1箇所設置される。地域包括支援センターの担う活動のひとつとして認知症サポーター養成講座を地域で展開していく取組を始める。

5人のキャラバン・メイトの方にサポーター養成講座の講師を引き受けていただけることになった。

初めて久米地区老人会に対しサポーター養成講座を開催する。

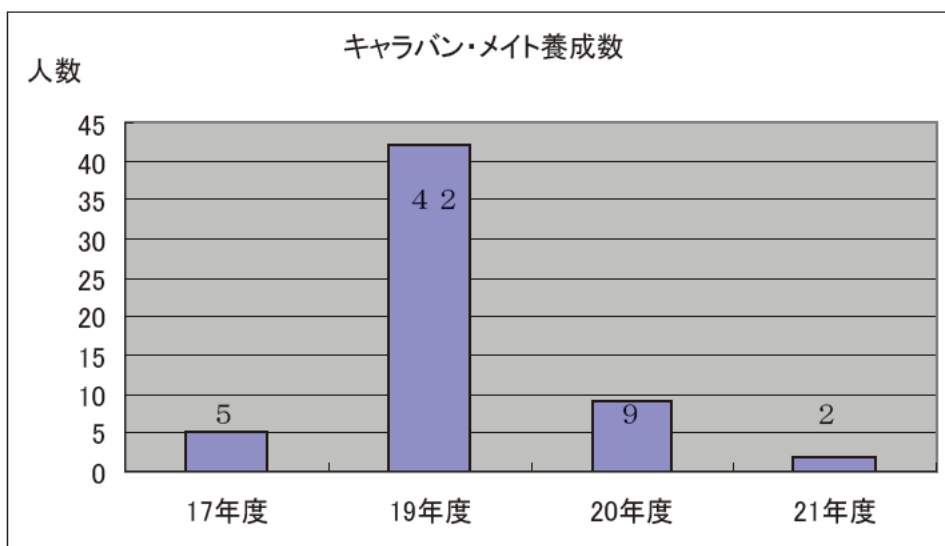
（3）平成19年度

「地域包括支援センターだより」で認知症サポーター養成講座のお知らせをした。これをきっかけにボランティアグループから依頼を受け第2回目の養成講座を開催した。

また、食生活推進協議会や民生委員、老人会等に声かけをするとともに市職員を対象にした養成講座を行った。

今後さらに養成講座を地域に展開していくためには、5人のキャラバン・メイトでは動きが取れないためキャラバン・メイト養成研修を行うことになった。全国キャラバン・メイト連絡協議会に相談はしたが、講師は自前で調達するよう言われ自前で行った。講師には認知症かかりつけ医を、医師会を通じて派遣してもらい、介護の現場からは老人保健施設の職員に協力してもらい、午後からの養成講座の企画をキャラバン・メイトの協力で行うことができた。（すべて市内の講師）

受講者を集めることにも苦労したが、居宅介護支援事業所や社会福祉協議会に周知したり、近隣の市町の協力も得て68人のキャラバン・メイトが生まれた。



(4) 平成20年度

保健センターが毎年行っている健康のつどいのテーマが「認知症」だったのではじめて共催で開催した。これは保健センターが場所をセッティングし周知を行うものだったが思った以上に人が集まった。

今まで「サポーター養成講座をしませんか」と相手に開催を呼びかけていたが、これをきっかけに地域包括支援センターが主催となって行う養成講座も開催し始めた。

小学生向けにも実施を考えていた時に、市内のキャラバン・メイトからも小学生向けに実施したいと話があり、キャラバン・メイトのお子さんが通う学校での開催、地元の縁を活かし、小学校で7回キッズサポーター養成講座を開催することができた。

年度後半からは銀行や県を通じてイオンなどから依頼があった。

この年、全国キャラバン・メイト連絡協議会が企画するキャラバン・メイトスキルアップ研修をホームページで知り、もっと勉強したいという気持ちから企画に応募した。費用がかからないというのも魅力だった。これは、行政・地域包括支援センター職員、医師向けのものであった。参加者を集めるのに苦労したが、医師会員4名、平成19年に受講した近隣地域包括支援センター職員、行政職員の他県内の地域包括支援センターからも参加があった。

スキルアップ研修には全国キャラバン・メイト連絡協議会から事務局長と、スキルアップ研修テキストを作成された敦賀温泉病院玉井顯先生に講師としてお越しいただき、勉強することができた。脳の話、認知症生活支援アンケート（観察方式）とBFB脳機能評価表についてなど、より専門的な研修となった。その後、このツールを使って認知症の相談に活かしたり、受診勧奨の裏づけにする活用を始めた。

小学生を対象にしたキッズサポート	
目的	松葉杖をついていると足が悪いとわかるが、認知症は外からみてもわからない。目に見えない病気もあることを知る。そして嫌悪せず思いやりを持ちやさしい対応ができる。
ポイント ・ 前準備	<ul style="list-style-type: none"> ・各学校に挨拶やお手伝いなどの取組み運動があるのであらかじめたずねておく。 ・防犯上、知らない人に声をかけてはいけないなどの指導があると思われるので、場合によっては近くの大人に伝える、相談するなどの話をする。 ・席次を事前に聞くことで子供の名前で声をかけることができる。 ・一方的な話はしない。 ・絵などを利用して発言させる工夫をする。 ・うちでこういうことがあったらどうするかなど内に向けて考えさせる。

小学校でのサポーター養成講座の様子



先生主演のロールプレイを見ているところ

イオンでのサポーター養成講座の様子



認知症のお客さんとの対応（ロールプレイ）

(5) 平成 21 年度

11月26日現在、サポーター数は2,785人になった。今年は当初より地域包括支援センター主催の養成講座を計画した。

認知症をさらに理解するため4回コースで講演会シンポジウム等を開催する予定である。

《取組一覧表》

年度	取 組	備 考
17年度	キャラバン・メイト5人誕生	
18年度	キャラバン・メイト初顔合わせ、初の認知症サポーター養成講座開催	直営地域包括支援センター設置（1箇所）

19年度	本格始動 地域包括支援センターたよりでの周知 口コミで商店街・コンビニ・消防署等へ講座の売込みを行う。 キャラバン・メイト養成研修開催	委託地域包括支援センター設置（4箇所） 徘徊高齢者の相談、発見のための協力機関の必要性を感じる。
20年度	保健センターとのコラボレーション 自らサポーター養成講座開催企画 企業からの依頼が数件でできた 講演会の開催 小学生への実施 スキルアップ教室開催	医師会の発案で地域包括支援センターと認知症ネットワーク連携部会を定期的開催。 認知症徘徊 SOS 緊急ネットワーク協力機関を集う。

	18年度	19年度	20年度	21年度(予定)	計
小学校	0	0	7	1	8
講演会			1	1	2
老人会	1	2	1	2	6
保健センター			6		6
包括支援センター			4	6	10
企業主催		1	7	9	17
ボランティア・サークル		4	1		5
一般市民の希望			1		1
キャラバン・メイト主催			1	1	2
市職員		4	2		6
民生委員・地区社協		1	1	1	3
計	1	12	32	21	66

③ 今後の課題

地域包括支援センターの設置とともに始まった認知症サポーターであるが、これまでに多数の人に受講してもらった。平成20年度途中からアンケートをとるようになった。「今後地域の高齢者を見守り、気になる高齢者が出たときに高齢福祉係または地域包括支援センターに連絡していただけますか」という設問がある。約2割の人が協力してくれるという結果がある。そのこと事態、サポーターの役割でもあると思うが、今後このサポーターをどう生かしていくかが課題となる。

次に、サポーター養成講座の実施とともに医師会をはじめ介護保険事業者とのネットワーク作りも開始した。『認知症になっても可能な限り住み慣れた地域でなじみの人やなじみの家で暮し続ける』という目的のために

- (1) 認知症を理解し本人と家族を見守る応援者づくり。
- (2) その応援者も将来本人か家族が認知症になる可能性がある。そうなったとき、早期受診・早期支援を受けることができるようになる。
- (3) その受け皿として次のことが今後求められる。各専門職の専門性を高めるとともに、専門職間のネットワークを作り上げる。

サポーター養成講座については、今後小学生のみでなく中学生、高校生にも実施できる

よう学校関係者へ周知していく必要があると考える。

今まで行ってきた認知症サポーター養成講座では同じ人が複数回受講されるということがある。同じ話でも何度も聞くとそれだけ理解が深まるので有意義であると思う。しかし、広くいろんな方に聴いていただきたいと考えることは当然である。

平成21年度、新聞専売所から依頼されたサポーター養成講座は新聞の折込での周知で、全て初めての出席者であった。多くの人に参加してもらえるよう効果的な周知方法、啓発を行っていききたい。